

---

---

# □ オペラ

## 堀内 修

---

オペラの住いは歌劇場で、日本の歌劇場といえば東京の新国立劇場ということになる。当然日本のオペラ上演の中心はここにあるのだが、発足するまでが長かったためか、いまなお日本のオペラ上演は完全な中央集権ではない。それは必ずしも弱点でなく、むしろオペラ上演の多様性と活力を生む力となっている面もある。

オペラはオペラの劇場にまかせる、のではなく、コンサート・ホールで、オーケストラの公演でも上演してゆく、という傾向は、もう何年も前から始まっている。それにしても2015年は、オーケストラの定期演奏会で聴くオペラが充実していた。もちろん演奏会形式だが、全曲の上演だ。

読売日本交響楽団は9月の定期公演でワグナー「トリスタンとイゾルデ」を取り上げた。常任指揮者カンブルランの、特に力を入れた演目であるのは容易に想像できる。イゾルデを歌うソプラノが変更されたが、それも含め、歌手陣は大変充実していたし、読響の演奏もすぐれていた。出色の「トリスタンとイゾルデ」が、オーケストラの定期公演で実現した。

NHK交響楽団はシャルル・デュトワがオペラ全曲を振るコンサートが、恒例のようになっている。2015年はドビュッシー「ペレアスとメリザンド」だった。こちらも歌手は揃っていたし、デュトワ得意の演目ということもあって、大変すぐれた演奏となった。

東京フィルハーモニー交響楽団は、首席客演指揮者のアンドレア・バッティストーニが指揮したブッチェニ「トゥーランドット」が好評で、CDも発売するに至っている。ポピュラーな演目で人気を博する一方、特別客演指揮者ミハイル・プレトニョフは、R・コルサコフ「不死身のカッチェン」という、珍しい作品を、高い水準で演奏した。東フィルは新国立劇場での活動も多く、オペラのオーケストラとしての色彩を強めている。

新日本フィルハーモニー交響楽団はデリック・イノウエの指揮でバルトーク「青ひげ公の城」を演奏し、すっかりオペラ全曲上演はオーケストラの定期公演に組み入れられたかたちになっている。

演奏会形式の上演なら、東京・春・音楽祭も、多少の視覚的要素を加えてはいるが、基本的にはこちらのスタイルでオペラを上演している。ワグナー「ニーベルングの指環」が進行中で、2015年は「ワルキューレ」だった。指揮するマレク・ヤノフスキ人気とともに、この「指環」の人気も年を追うごとに上っている。

演奏会形式ではもうひとつ、東京オペラ・シティで上演されたカイヤ・サーリアホのオペラ「遙かなる愛」の上演も、現代オペラの新鮮な魅力を伝え、好評で迎えられている。

日本では上演の機会が少ないとされてきたバロック・オペラが、ようやく注目されるようになってきたのも2015年だったのではないか。

大評判になったのは、ピオンディ指揮エウローパ・ガランテが神奈川県立音楽堂で、演出付きではあるが演奏会形式に近いかたちで上演した、ヴィヴァルディ「メッセニアの神託」だっ

た。歌手が揃ったこともあって、これは、18世紀ヴェネツィアのオペラの魅力がはっきりわかる上演となった。

12月に北とびあで上演された「妖精の女王」は、シェイクスピア「真夏の夜の夢」によるパーセルの作品の本格的上演として注目された。演奏の活力は不足していたとしても、試み自体は成功したのではないだろうか。

紀尾井ホールでは、ベルゴレージの「オリンピアアデ」が、演出付きで上演されている。これも好意的に受け入れられた。

東京二期会が新国立劇場・中劇場で上演したのは、ヘンデル「ジュリオ・チェーザレ」だったが、本格的なバリオド楽器による演奏と現代的舞台という、欧米では一般的になっているバロック・オペラの上演スタイルが、日本でもようやく板についてきたと、支持されることになった。

人気ということなら、全国共同制作プロジェクトとして、春と秋に日本各地で上演された、モーツァルト「フィガロの結婚」が一番だったろう。「庭師は見た」と副題が付けられたのは、野田秀樹演出、井上道義指揮によるモーツァルトだった。詞や歌は自由に変えるが基本はそのままという上演で、これまでのオペラ・ファンとは違う、新しい観客層を獲得した。

劇場からはみ出した公演ということなら、オペレッタもその本領を発揮する。東京芸術劇場では「メリー・ウィドウ」が、セミ・ステージくらしいスタイルで上演されたし、オーストリア・メルビッシュ湖上オペレッタは、河口湖畔のステラ・シアターで「こうもり」を上演した。サントリー・ホールでの、ウィーン・フォルクスオーバー交響楽団による、年越しの「メリー・ウィドウ」も、はみ出した上演というべきだろう。

本格的な、海外の一流歌劇場の公演では、ロンドンの英国ロイヤル・オペラが2015年の主役だった。上演したのはモーツァルト「ドン・ジョヴァンニ」とヴェルディ「マクベス」だった。どちらも音楽監督アントニオ・パッパーノが指揮した。歌手の陣容も充実していて、上演の質は非常に高い。質が高いだけでなく、現代のオペラ上演の最前線を、まざまざと示した。歌唱においても、演奏においても、そして作品の解釈と表現においても、2つのオペラは現代の芸術としてのオペラを感じさせた。

東京の2つのオペラ・カンパニーも、2015年は健闘した。東京二期会は、準・メルクル指揮深作健太演出のR・シュトラウス「ダナエの愛」で実力を知らしめ、バッティストーニ指揮の「リゴレット」や宮本亜門演出の「魔笛」など、それぞれに特徴のある、魅力的な上演が評判になった。

藤原歌劇団も、創立80周年を締めくくるゼツガ指揮「ファルスタッフ」のあと、日生劇場での「ランスへの旅」、そして「仮面舞踏会」と、いずれも好評だった。

そして新国立劇場だ。2014/15年のシーズンには、2つの新制作上演を行なっている。プザール演出アベル指揮の「椿姫」は、グローバルな歌劇場としての新国立劇場の性格を実証するものだった。大震災の折に出来なかったプロダクション「マノン・レスコー」は、時の経過を感じさせるものだった。

新シーズンは、新しく制作される「ニーベルングの指環」の序夜「ラインの黄金」で始まった。新しいとはいえ、20世紀の古いプロダクションで、新国立劇場の「指環」は、最新の舞台から古い舞台へ向ったことになる。しかしそれだけにと見るべきだろう、新国立劇場は安定したオペラの観客を抱え、日本のオペラ上演の中核としての役割りを果している。